

コラム 日露戦争前の学生生活

あの頃春は御殿山へ花見に行き、夏は青葉の下陸に涼み、秋から冬は枯野の日向に寝転んで、文学雑誌などを読むやら、ワースワースやバイロンの詩集を読み代りに、朗読したりしたものだが、そういう時も落花生の三角の袋を各自腰に忍ばせることを忘れなかった。ボートを品川沖から大森の方へ漕ぎ出た時でも、鈴ヶ森へ上陸して彼処の懸茶屋で醤油や醤油を食べないでは納まりが悪かった。春は大崎村へ苺を食べに行き、秋は目黒村へ梨と栗とを食べに行つた。クリスマスの晩に西洋人の先生から招かれて、珈琲や西洋菓子御馳走になることは、実に一年中での楽しみの一つだった。どの先生もよく御馳走してくれた。監事からは寄宿生一同へ毎年の夏、自分の畑に出来たという苺を振舞われ、校長さんからは卒業前に必ず招かれて腹一杯御馳走になるのが、学院の年中行事になっていた。私は今でもその御馳走になった食物を食べることに、ワイコツさんや、ランチスさんや、井深先生や、熊野先生の傍を懐い出す。

(生方敏郎『明治大正聞史』、一九二六年九月)

第四節 学院と社会の関わり

第一 足尾鉍毒事件

明治三〇年代に起った社会問題のなかでも、とりわけ注目の的となつたひとつに、足尾銅山の鉍毒事件があ

る。これは栃木県古河鉍業所、足尾銅山から流出した鉍毒が渡良瀬川、利根川の流域を荒廃の地と化し、農作物を枯死させ、農民を困窮へ追いやった問題である。既に一八八九(明治二二)年に徴候は現われていたが、行政、企業ともに改善の努力を怠つたため、一九〇〇(明治三三)年農民は遂に大挙して上京、警官隊と衝突した。その結果、「凶徒集罪」で多くの農民が逮捕され、あるいは立ち退きを命じられた。

この事件は当時のキリスト教界に大きな衝撃を与え、島田三郎、内村鑑三、田村直臣、安部磯雄、木下尚江、松村介石、本多庸一といったクリスチャンの著名人が支援の発言と政府を攻撃する行動を取った。島田が経営する毎日新聞は、運動の一環として一九〇一年一二月、東京府下の学生に対し、鉍毒視察旅行に参加するよう呼びかけを行つた。発起人代表は田村直臣である。

呼びかけに応じた学生は、やがて八〇〇名を超え、そのなかには明治学院の学生も一五名加わっていた。彼らは歳末の一二月二七日上野駅を出発、栃木県古河駅で下車、そこには現地の歓迎員が待ち受け、総勢一、三〇〇人という人びとが隊列を組んで示威のための大行進を行つた。ここには内村鑑三も加わつて、一場の演説を行っている。毎日新聞(一九〇一年一二月二九日)には、「古河停車場には鉍毒地人民の総代等五百余名『歓迎東都学生諸君』と大書せる二十余旗の大小旗を翻して待ち構へたり、聞く、鉍毒地三十万の人民は学生大挙視察の企あるを耳にして以来歓喜殆ど寝食も忘るるばかりなりきとぞ」と記されている。

コラム 学生大挙、鉍毒を視察

古河町を西に行くこと数町、思川が渡良瀬川に合流する所に至る奇橋あり、三國橋と云ふ、是れ栃木、埼玉、茨城の三角

相合せる所なり、思川を渡り渡良瀬に沿うて行く、是れ栃木県下都賀郡谷中村にして、鉱毒地中劇毒なる者の一に属す、一行導かれて近々たる豊原に入れり、是れ曾て豊永を以て聞へたる田畑の死骸なり、土地の老若、路に要して煙々として其の変遷の惨憺を説く、豊原を過ぎて村に入る、宅地の跡を留めて主人の行方知れざる遺若干、其の僅に残る者も軒傾き屋漏り、人亦た既に地上の人の色を示す者なし、青年の鮮血安んぞ地に湧き返へらざるを得んや、先鋒既に監督委員が教示せる古沢繁治なる者の門を覗らみ過ぎて、其の右手なる寺院の廢趾に達し、以て全隊の到着を待てり、如何にも奇怪なる哉、此の農村滅亡の間に立ちて荘宏なる一新築の家宅を見ること、既にして幾流の巨旗は早くも此の奇怪なる家宅の門内に翻りぬ！

（『毎日新聞』一九〇一年十二月二十九日）

彼らはいずれも渡良瀬川流域の「是れまがふ事なき此世の墓場なり。風雨に晒されたる白骨に外ならず、惨憺の状目之を見るに堪へず」という状況をつぶさに視察して帰京した。直後の一九〇一年十二月三〇日、神田美土代町の基督教青年会館で「学生鉱毒視察報告大演説会」を開催、義捐金を募ったが、聴衆のなかには若き日の河上肇の姿もあった。その後学生達はそれぞれ学校所在地別に分かれて学生隊を組織、路傍演説に向った。

明治学院生も芝区区内を対象として募金と演説を行い、そのため幹事の熊野雄七は東京府から出頭を命じられ、監督不行届のかどで注意を受けた。

後の学院総理となる田川大吉郎は、当時衆議院議員の立候補準備中であつたが、明治学院生もかかわった学生隊の行動について、次のように論評していた。

一九〇二年一月十九日、田川は、「学生諸君へ路傍演説ヲ為シ世人ニ救済ヲ勧誘シタル意気込ハ実ニ感スルニ堪ヘタリ、然ルニ其筋ヨリ力或ハ学校ノ意思ニ出デタルカハ別問題トシテ路傍演説ヲ中止スルコトトナリタルハ薄志弱行ノ徴ナリ、学生ガ一旦企テタルコトヲ一片ノ訓戒ニヨリ其意志挫折シテ之ヲ中止スルガ如キコトニテハ

到底何事モ為シ得ザルベシ、併シ余ハ学生トシテ路傍演説ヲ為スガ如キハ其本分ヲ越ヘタルモノト信ス」と述べ、被害農民の救済に奔走する田中正造を相手に、あるいは支援者に向つて批判的な応答を示した。

何故だろうか。田川は一九〇二年一月十八日、基督教青年会館で「鉱毒問題と学生」、二月八日、「鉱毒問題を評す」、二月二十二日・三月八日、「鉱毒問題草見」と続く演説を通じて、「田中氏は事体立憲政治の何者たるかを知らないもので、其不学無識、残念ながら想像の外です。議員を辞したる氏の志は議会を見限ったからだと申すことですが、議会を守り立てるのは鉱毒被害民、被害地を守り立てるよりも、国家に取り更に大切なことで、立憲政治下の民は、財産は国より身命を賭しても之をやらねばなりません。どこに国会を見ず、立憲政治有終の効果を遂げ得た国家がありますか」と述べている。

このように、田川の主張は立憲政治の筋道からみて、鉱毒問題の解決はあくまでも国会を通じて図られるべきで、大衆運動によつて得られるものは一時的な対応に過ぎない。従つて根本的な問題解決にはならないという。後に明治学院の総理に就く人物が、このように学生の行動を見たことは、知つておいて良いことである。

第二 日露戦争と明治学院

一 プロテスタント・キリスト教界と日露戦争

日露戦争は、学院の教育および学生生活にも大きな影響を与えた出来事であつた。学院では一九〇四（明治三十七）年一月の日露開戦とともに、学院生の間に戦争支援の演説会が盛んに開かれ、翌年初頭の旅順陥落時には学

人名索引

ア	相沢徳治 249	72, 73, 75, 85, 100, 102, 107, 113, 115-117, 119, 133
	アイゼンハワー 349	
	相原 249	新井 毫 131
	青木周蔵 134, 146	有馬良橋 104
	青木愼九郎 104	アレキサンダー (Alexander, Thomas Theron) 101
	青木仲英 104	栗津高明 45
	青木健作 4	安 重根 167
	青山昇三郎 100	安西 愈 4
	青山彦太郎 104	安藤太郎 45
	赤井米吉 190, 191	
	赤岩 栄 311	イ
	赤壁二郎 92	飯島誠太 149
	赤川 裕 372	李 仁夏 502
	赤松 桂 377	李 光洙 (李宝鏡) 14, 15
	秋元 徹 324, 354, 608, 609	井川一久 488
	秋山繁雄 618, 619	井口弥寿男 149
	芥川也寸志 336	池 亨吉 161, 162
	浅井基文 435	池部 良 20, 27
	浅原 進 4	伊佐正敏 526
	朝吹英二 92	伊澤修二 92
	芦田 均 352	石井次郎 282
	安積力也 579	石井俊之 620
	麻生武平 148	石尾 (岡田) 三郎助 104
	アビール (Abeel, David) 32, 34	石垣純二 382
	安孫子治 523	石川三郎 66
	安部磯雄 153, 156, 160	石川三四郎 160
	阿部志郎 324, 338	石川林四郎 183
	安部正義 25	石谷 豊 523, 551, 563, 568, 569, 576
	天達忠雄 22, 246, 247, 265, 266, 355, 373	石橋近三 202, 225, 248, 283, 292, 622
	天野祐吉 643	石原 謙 177, 304
	雨森信成 74, 76, 100, 102	石原保太郎 64, 92, 100, 120, 148
	アメルマン (Amerman, James Lansing)	石本三十郎 66, 102, 106, 115-117, 120
		泉 隆 526, 549, 551, 553, 556-558, 560, 562,

明治学院百五十年史

二〇一三年十一月一日発行

発行者 大西晴樹

発行所 学校法人明治学院
東京都港区白金台二丁目三十七番一〇八十八番三六

編集 明治学院百五十年史編集委員会

制作協力 株式会社雄松堂書店

印刷 藤原印刷株式会社
製本 牧製本印刷株式会社